

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年九月
風子 凡士 和永			さんさら 誠慈 鶴城		楽 土璃 しーしー わがん		はっち	梗舟	風子				米山 佳月		
完走し仰向けに見る鱗雲 完走の充足感に鱗雲が美しい。頑張りましたね。	唐辛子右手に宿る淡き熱	並び見る友のまなこや秋夕焼け	野分あと足るを知るなり三姉妹 今年はこんな思いが沢山。地球温暖化に「足る」を反省しなければ。	珈琲の底を占ふ秋時雨	乳飲み子の啞え直せし夜長かな 夜長を見事に詠んでいると思います。	宮の杜櫓太鼓の大一番	百八星猪を炙つて酒呷る	銀輪にさや当ていくど青とんぼ	稲刈りや厠でばやく三代目 米価の安さか、いやいや農家を継がされたボヤキか、農村の現風景。	大花野前行く人の影は無し	長月や猫の額を土起こし	貝割菜支え合いつつ生きてゆく	喜寿若し西瓜の種を飛ばしたり	ケチャップの赤にほだされ食らう秋	
新 暦 文	さんさら	ありぎりす	新井のり子	西窪弘子	米山 カ ロ リ ン グ	春 駒	山 菜	しーしー	北郷興亜	つぶ金	栗城晋作	森 佳 月	宇田靖之	渡部孝子	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年九月
	ひろし きいち			わがん	米山 田猫		霜里	きいち 順一	くみこ	土璃 しーしー はっち たくみ	喜夫				
縦走のゴールの足湯かなかな	横綱も宙を飛んだり草相撲 宙を飛んだりが面白い、いかにも草相撲。	最終のわざと逃して天の川	ガキの日の記憶バツタの匂いかな	良妻の呪縛解くるや曼珠沙華 好きなように生きよう、曼珠沙華の突き抜けた美しさのように。	たうたうと国境またぎ天の川	有りし日の祖父母祖父母曼殊沙華	白露の雨山から天に昇りけり 秋の静けさを感じます。	煮こぼるる芋煮の匂ふ河原かな 鍋にいつぱいの芋煮会の様子が浮かんできます。	おさがりの服の最後は案山子かな	おさがりの服の最後は案山子かな 可愛い案山子でしょう。案山子の配置がいいですね。	振れるとは生きる術なり朝顔も ね。（振じれる）何かを頼りに生きていかなければ？人生感が深いです	紺ひかる 舞う削り節 秋の茄子	迸るレモンの香り皿に盛る	鰯雲泳がぬ空や温暖化	
くるみ	日高道を	石関六弦	峰岡誠慈	渋谷きいち	小林土璃	青木鶴城	山川充	吉沢美佐枝	河野凡士	河野凡士	網野月を	明陶家	光雲2	雪待月田猫	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年九月
				くるみ 順一 誠慈 田猫 鶴城		暦文 風子 和永 しーしー 道を		喜夫	凡士	光雲2 六弦	梗舟	道を		さんさら	
星月夜シミュレーションに没頭す	隣人の部屋の開く音夜寒かな	指に付く液の粘りの秋思かな	国のため酒税せつせと敬老日	色鳥や人はスマホに飼われつつ 「飼われつつ」がお見事だと思ひます。「飼われつつ」は大袈裟だと思ひつつ、妙に印象に残る句でした。素晴らしい写生の句。	皺の手に写真図鑑やきのこ狩	病院に癌捨てて来て松手入 中七が秀逸。良かったですね。	大雨をくぐりてかほる今年米	秋の蚊は打たず払わず見送らん 最後の人生は穏やかに見送らん 達観ですね。	休暇明けいつもの街の朝マック	奥能登の棚田にすくと立つ案山子	願い事言いきれぬまま流れ星 夜空に一瞬ですね。	真白なる磁器の深さや秋の蝶 二物衝撃の距離感が其々を際立たせている。	バターよりあずきを好む彼岸かな	秋風や齒科廃院の報せあり 季節の移ろいと時間の流れに一抹の寂しさが際立つ。	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年九月
宇田靖之	平野 楽	石川 順一	染谷 風子	神谷 たくみ	立野 音思	小林 陸人	わが ん	霜 里	高田 はつち	岡崎 梗舟	きりり	くみこ	持永 喜夫	高松 和永	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年九月
佳月		くみこ はっち	誠慈			楽 六弦			つぶ金 のり子 わがん たくみ		凡士			光雲2 和永 梗舟	
逝く夏のこころの襷を洗ふ波 こころの襷を洗うという表現がいいですね。	秋日傘ふつと拾いしにわか風	秋日傘歩道のチャイム通りゃんせ	宵闇にゆれる芒は星を詠み	冬銀河ロックバンドの音色かな	高値慣れ今宵も半尾さんまかな	図書本の来歴たどる夜半の秋	点滴が終わるの見てる長い夜	潮騒は子守唄なる秋の午後	七輪やバーの裏手に焼く秋刀魚	庭仕事無花果食むや十時かな	台風や番屋を叩く潮の雨	うなだれて雨の音聞く日々草	梨の香に今年も挨拶ありがとう	母の背の匂い微かにタ化粧 懐かしい匂いですね。	
光雲2	ありぎりす	新 暦文	さんさら	米山 力 ー リ ン グ	新井のり子	西窪弘子	しーしー	春駒	山菜	栗城晋作	北郷興亜	つぶ金	渡部孝子	森 佳 月	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年九月
	霜里 順一			春駒 つぶ金のり子 くるみ	暦文 ひろし		春駒 六弦			暦文				くるみ	
長雨やアスファルト映す車の灯	総身に秋を授かりペダル漕ぐ 「授かる」が効いている。	寒暖差ありくしやみあり秋の風	中空に余白の広し秋の空	秋晴や山門よこの行書体	霊峰に一礼をしてして山閉じる	目黒まで出向ひて秋刀魚江戸の風	赤とんぼ馬上の嫁御見送りぬ 絵本の中の様です。	動く歩道せかせかと行く健次の忌	朝霧の水滴湛ふ黄金の穂	反故積みて夜の更けゆくや秋螢	秋の水エアー俳句も良いもんだ	動く歩道せかせかと行く健次の忌	虫たちは月と逢えずに泣きにけり	指南書を片手に剪定 秋支度	
持永喜夫	高松和永	峰岡誠慈	日高道を	石関六弦	青木鶴城	渋谷きいち	小林土璃	河野凡士	山川充	吉沢美佐枝	網野月を	河野凡士	雪待月田猫	明陶家	

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年九月
			ひろし きいち 喜夫 鶴城		楽 米山 くみこ のり子		土璃 光雲2	春駒 佳月 さんさら 道を			たくみ 田猫		つぶ金 霜里		
		遠き人の声が聞きたき夜寒かな	思ひ出の数だけ群れて赤とんぼ 思ひ出の数だけ群れての表現が秀逸でした。	秋風のみなもと恐らく渦巻いて	老いらくの恋はこれから初さんま こんな句を詠めるって幸せだ。	病室に寝たきりの日々紅葉濃し	夕照に揺るるすすきや小町塚	絵手紙の大き過ぎたるさつまいも なにかほっこりとしませす。	旅人の犬と戯れ秋の雲	糸瓜忌やヌク飯盛りて箸一膳	走り去る影の平らさ秋の風	盆踊振りはスマホで稽古する	読み返す本より出でし紅葉かな 去年の秋も同じ本を。	ひそやかに風を湿らせ萩こぼる	
		平野 楽	神谷たくみ	石川 順一	染谷 風子	小林 陸人	立野 音思	高田 はうち	わがん	霜 里	くみこ	岡崎 梗舟	きりり	くるみ	